

閉店後のパチンコ屋で～博徒美女とカーセックス～

【体験版】

仕事が早めに終わり、俺は ATM で金を下ろすと、その足で行きつけのパチンコ屋へ向かった。

自動ドアが開く。

耳に飛び込んでくるのは、いつもの騒音。

今日も勝つぞ。

胸の内でそう呟きながら店内を見渡した。

自分で言うのもなんだが、パチスロの腕にはそれなりに自信がある。

パチンコはさっぱりだが、パチスロは違う。

台が発する小さなサインを拾い集め、設定を読み解く。

その作業がたまらなく好きだった。

もしかすると、俺は博打好きというより、データ分析が好きなのかもしれない。

そんなことを考えながらホールを歩く。

そして、その日は運良く高設定らしき台を確保することができた。

投資一万七千円。

そこからボーナス、AT、上位モード。

気付けば獲得枚数はどんどん増えていった。

五千枚。

七千枚。

九千枚。

久しぶりの大勝だった。

だが、あと少しで万枚というところで閉店時間が訪れる。

惜しい。

本当に惜しかった。

それでも十分すぎる勝利だ。

俺は満足しながら景品交換へ向かった。

その時だった。

視界の端に、気になる女性が映った。

派手な化粧。

夜職をしていそうな雰囲気。

整った顔立ち。

そして、閉店直前にボーナスを引いてしまったらしい不運な客。

換金額はわずかだった。

俺と同じ時間帯から打っていたことを考えれば、かなり負けているはずだ。

少し気の毒だな。

そんなことを思っていた。

まさか、その数分後に話しかけられることになるとは知らずに。

換金を終えた彼女は、灰皿の前に立った。

俺の隣だった。

煙草に火をつける。

夜空へ白い煙が溶けていく。

「ねえ、お兄さん」

突然、彼女が声を掛けてきた。

「ん？」

「今日、いくら勝ったの？」

ずいぶん直球だなと思った。

だが隠すことでもない。

俺は正直に答えた。

そこから少しだけ会話を交わした。

そして。

「私は大分つぎ込んだじゃった……はあ……」

彼女は煙と一緒にため息を吐いた。

「お兄さん、もう今日は帰るだけ？」

「ああ、もう帰るよ」

「ふうん」

彼女は何かを考えるように頷く。

吸いかけの煙草を灰皿へ押し付ける。

そして俺を見た。

「ねえ、お兄さん」

「ん？」

「二万でどう？」

一瞬、意味が分からなかった。

「……何が？」

聞き返す。

すると彼女は当然のような顔で言った。

「二万で、援交してくんない？」

思わず固まった。

パチスロで大勝した夜。

閉店後の駐車場。

そして突然現れた謎の美女。

俺の予想もしなかった夜が、ここから始まろうとしていた。

【製品版へ続く】